

〔政事要略九十五〕又疾令醫云、醫生既讀諸經、乃分業教習、中以十二人學體療、

○按ズルニ、醫疾令ニ體療トアルハ、即チ所謂内科ニシテ、創腫、少小、耳目口齒以外ノ身體諸病ヲ治スルヲ謂フナリ、

〔倭訓栞前編二十八〕ほんだう。朝野群載に、本道人以本道成業など見えたるは、本算道之官など

見えたる如く、四道の類それ〴〵の本職をいへり、今もはら醫流に、啞科、女科、外科に對し、内科を本道といふは、薩戒記に、和氣丹波之一流謂之本道と見え、康富記にも、本道の部に入らる、といふ事も見えたり、

〔奇魂〕醫藥名義并醫風變化附本道辨

本道と云は、公にて立おかる、本醫の外に、權カに用らるる醫を權道と云に並べ云時の名なるを、世に渾身しんぢを治る醫にかけて云は誤也、そを又本科、本治、本療、抔云は愈非也、されば此の書は更也、漢籍に十三科抔立たれど、本道と云科なし、いはゆる本道は、體療又は内科と云ぞ正き、下法刺に引ける、中原康富記に、所詮爲權道之間、御針不可苦云々、本道醫師中、當時無針之名譽云々と有にて悟べし、こは易きことながら、世に辨たる醫をさ〴〵なかめれば、序に驚す物ぞ、抑中古より家を世々にし、又唐に擬ひて科を分ちしより拙く成けらし、醫道に科を分こと有べからず、

〔薩戒記部類二〕醫師 醫道ハ和氣氏丹波氏、是ヲ和丹兩家ト云フ、醫者ノ本道云々是也、當時半井典藥、千本典藥ナド稱之也、

〔康富記〕嘉吉二年十月廿五日壬子、是日禁裏花様後園、御腫物平愈、御候間、御付藥洗落之、御内藥モ今日マデ被聞食也云々、早々御本復天下大慶也、珍重候、醫師下郷也、益一砂金三十兩被下云々、御内藥者清阿、又典藥頭丹波頼豐朝臣等令調進者也、其外之本道醫師、秀長朝臣、盛長朝臣、茂成朝臣、篤